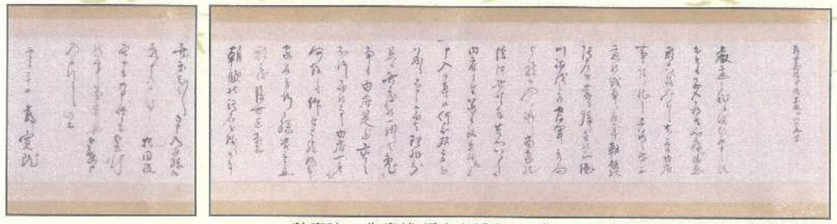
(2)静寛院と天璋院による
徳川家存続の嘆願

・「徳川慶喜の助命歎願」
・「徳川家存続の嘆願」
・「江戸城無血開城」



静寛院　御書状 橋本少将宛　一部　　広島県海の見える杜美術館所蔵

慶応4年(1868)1月7日、**鳥羽・伏見の戦い**で勝利した新政府軍は、朝廷の権威を象徴する「錦の御旗」を掲げると、**15代徳川慶喜を「朝敵」**とする追討令を発しました。これにより徳川家は正当性を失い、慶喜は海路江戸に敗走し、すぐさま**新政府への恭順を示し、助命嘆願**を朝廷に奏上する旨の書状を皇女和宮に託しました。

静寛院宮は、1月15日慶喜と面会、**叔父の公卿橋本実麗**(さねあきら)**とその息子実梁**(さねやな　東海道先鋒総督兼鎮撫使のちに東海道鎮撫総督)**へ宮の直書2通と慶喜嘆願書を送付**し、「徳川家が後世にまで、朝敵の汚名を残すことは、私にとって実に残念なことです。何卒私へのお慈悲とお思いになり、徳川家をお取りつぶしにならないよう、身命に代えてお願い致します。(要約)」と願い出たのでした。

また、**天璋院**は、慶応4年(1868)2月、西郷隆盛にあてた**「天璋院書状 官軍隊長宛」**(1.21.以降2月中か)の中で、「徳川家存続について、私がこの一命にかけて、ぜひにもお頼みする」と送付しました。

慶応4年3月10日　**静寛院**は、再び**橋本実梁**(さねやな　東海道先鋒総督)の元に書状を送り、帰順者の**宥免**(ゆうめん　寛大な心で罪や過ちを許し責任を問わない)を要請したのでした。

このように幕府に残った静寛院は不仲であった天璋院とともに朝敵とされた汚名をそそぎ、「徳川家の家名存続」「江戸の戦乱回避」を願う嘆願を行い、平和的な体制の変革に寄与したとされています。

2.和宮の遺徳を偲ぶ小簾紅園

(1)揖斐川の河川改修で消失した呂久の渡し跡

明治政府は、デレーケによる木曽三川の改修工事を進め、大正10年(1921)には、**揖斐川上流改修の工事が起工しました。**これにより揖斐川は呂久の東側を流れることとなり、**流路は直線的に改修**されて、「呂久の渡し跡」は完全に**消失**してしまいました。そのころ、静寛院宮奉讃会主事**桑原随地著の「和宮御事蹟」**を読んで感激した、**郡上郡長田中平太郎**は、大正14年(1925)10月　**和宮を婦道の鑑と顕彰**して、**和宮の御事跡に関する書の購読**を進めて御遺徳を知らせることに努力していました。

その後、本巣郡南部水防組合の会合で、管理者となった郡長田中は、南部輪中組合の水防組合委員(各村長)らとの話し合いの中、呂久の渡し跡に、河川改修の恩恵を受けた地域が、**和宮を偲ぶ歌碑を建立**することで意見が一致し、後日行なわれた蓮生寺に村民を集めた講演会で、**3,000円の資金と50坪の土地**に御遺跡の碑を建設することになったのでした。

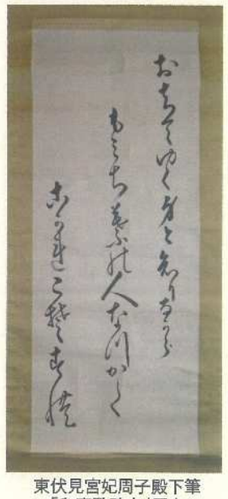


揖斐川上流改修実施図
大正11年　個人蔵

(2)良妻賢母の「婦道」の道

和宮の功績を偲ぶ話が出てきた大正時代は、**「大正デモクラシー」**と呼ばれ、女性の権利や社会進出への関心が高まり女性解放運動が活発化した時代であり、従来の女性像から新しい女性の生き方を模索する風潮が生まれてきたころでした。

その一方、政府や皇室は、女性が過激な思想に染まることを防ぐため、**良妻賢母などの「婦道(女性の道徳)」**を強調し、社会が変化しても家庭を守り国家に貢献する女性となるよう「女子の教育と規律」が重視されていった時代でもありました。こうした中、和宮の生き方が、「婦道の道」として評価されていきました。



東伏見宮妃周子殿下筆
「和宮歌碑文」原本
瑞穂市指定文化財　巣南公民館所蔵

(3)遺徳を偲ぶ小簾紅園

和宮の遺徳を偲ぶ動きは、大正15年(1926)9月2日、**和宮50回忌法要が御廟所の東京芝の増上寺で開催され、内親王(伏見宮・桂宮・有栖川宮・開院宮)宮家が参加**し、総理大臣若槻礼次郎が弔辞を詠むなど、**和宮の遺徳を広める動き**は高まっていきました。地方でも、和宮の遺徳を呂久区で**和宮渡船記念碑の建碑**の決議がなされ【同年12月25日大正天皇崩御】、昭和2年(1927)4月19日には、国会議員井上孝哉の発議によって、**芝の増上寺で岐阜県人会の臨時総会**が行われ、田中舎身ら議一決して和宮建碑後援会を組織して一万円の資金の調達が決定されました。

昭和2年(1927)7月**「岐阜県和宮様建碑会」**が成立し、**岐阜県知事金澤正雄を総裁**とし、**費用14,400円は寄付で1,000坪に迫る遺跡公園**が計画されたのでした。

昭和3年(1928)8月に、工事が開始され、**本碑となる歌碑(和宮御歌)**は、**東伏見宮妃周子殿下**(ひがしふしみのみやかねこでんか)**の御染筆(直筆の書)**となり、**副碑の撰文を下田歌子**(しもだうたこ)に、その書を**棚橋絢子**(たなはしあやこ)に依頼しました。【同年11月10日、昭和天皇　即位礼】。

昭和4年(1929)春、工事は早々に完成し、**工費1万4,400余円は寄附金**によって賄われ、同年4月26日、**和宮歌碑の除幕式**が**神式**で行われました。**北原白秋作詞「和宮奉讃歌」**が合唱され、除幕式終了後、新川河原で、祝賀の打揚げ煙火・餅搗き・角力大会・鷺田音頭など余興も盛大に行なわれました。

※小簾紅園では、毎年**4月26日小祭を神式**で、**10月26日大祭を仏式**で執行し、以後変わることがなく、営々と開催されています。

明治時代の揖斐川河川改修工事で、呂久の渡し跡を失い、その渡しや川湊で恩恵を受けていた人たちが中心となり、呂久にまつわる皇女和宮の遺徳を偲ぶ御遺跡づくりが始まりました。それは、当時、広まりつつあった女性の地位向上運動と和宮の婦道(良妻賢母の道)、そして、大正天皇の崩御と昭和天皇の即位があって皇室への関心が高まる中、東伏見宮大妃殿下に御染筆いただけた和宮の歌碑ができたことで、呂久の小簾紅園として、地域住民による偲ぶ場ができ、和宮遺蹟保存会を中心に例祭の場として、営々と継承できるものとなったのでした。

■協力者・協力機関（敬称略・順不同）
・和宮遺蹟保存会　・東京都江戸東京博物館　・大本山 増上寺　・篠山町篠山歴史美術館
・広島県海の見える杜美術館　・鹿児島県歴史・美術センター黎明館　・岐阜県博物館

■主催　瑞穂市教育委員会生涯学習課
瑞穂市宮田300番地2　TEL:058-327-2117

皇女和宮の降嫁と小簾紅園



和宮の肖像　　国立国会図書館「近代日本人の肖像」

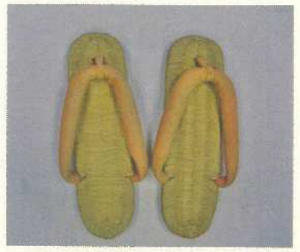
開催にあたって

江戸時代末期、幕府は外圧により開国を迫られ幕府の威信が失われていく中、天皇家と将軍家とを血縁関係を結び威信の回復をねらう歴史的な**公武合体策**がとられました。それが、仁孝天皇の第8皇女(孝明天皇の異母妹)が、第14代将軍家茂公へ嫁ぐことになった**「皇女和宮の降嫁」**でした。

この時、京から中山道を通り江戸へ向かう降嫁の大行列が、この地の「呂久の渡し」を御座船で渡られ、**「おちてゆく　身と知りながら　もみぢ葉の　人なつかしく　こがれこそすれ」**とその身の御感慨をお詠みになりました。この句は、後世になり和宮の遺徳を偲ぶため**呂久の小簾紅園の歌碑として**設置され、昭和4年に開設以後、毎年春と秋に皇女和宮の遺徳をしのぶ例祭が、降嫁の道中の中で、唯一欠かさず行われてきたのでした。

皇女和宮は、家茂公の逝去後、**静寛院宮**(せいかんいんのみや)として徳川家に残り、終焉を迎える幕府の混乱期に、天璋院(13代家定正室、薩摩藩出身、篤姫)と共に、**徳川家の存続や江戸城の無血開城**にも尽力されました。

令和8年度は、皇女和宮150回忌にあたり秋の例祭は、多数のご臨席を得て挙行されますが、なぜ呂久の地で営々と続けられてきたのか、和宮降嫁の全容や余り知られていない和宮の遺徳(功績)からみていきましょう。



和宮親子内親王東下の際の道中履物
瑞穂市指定文化財　巣南公民館所蔵

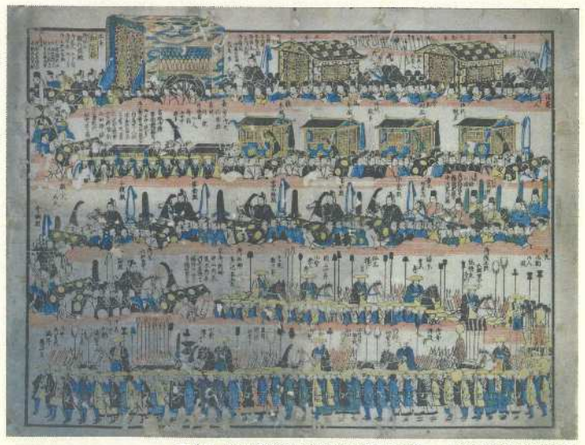


和宮「手折れの紅葉」
垂井町教育委員会・タルイピアセンター所蔵

皇女和宮の御歌
おちてゆく　身と知りながら
もみぢ葉の　人なつかしく
こがれこそすれ



和宮歌碑記念碑　呂久 小簾紅園



瓦版　中山道御下向御休泊御本陣附　　岐阜県博物館所蔵



和宮江戸下向絵巻　美濃呂久川の観楓　　東京都江戸東京博物館所蔵

令和8年度　瑞穂市企画展

皇女和宮の降嫁と小簾紅園

◇会　期：令和８年11月６日(金)～29日(日)10:00～18:00
休館日＝11/ 9(月)、16(月)、24(火)
◇会　場：瑞穂市図書館本館　２階　郷土資料コーナー

◆企画展講演会◆
呂久の渡しと皇女和宮

日時／令和8年11月21日(土)　13:30～
場所／瑞穂市図書館本館２階学習室　(開場13:00)
講師／和宮遺蹟保存会　加藤　悟 氏

第一部 皇女和宮の降嫁

江戸時代の末期、**開国を求める外圧**は長年鎖国を維持してきた幕府に衝撃を与えました。幕府は、その対応を巡り幕府の権威を大きく失墜させた一方で、**尊王攘夷運動は激化**し幕府を批判する動きが強まっていきました。そこで幕府は天皇の権威を利用する**公武合体政策**をとり、幕府の武力との統合を図るため**皇女和宮の降嫁を請願**したのでした。これは、天皇家から徳川将軍家正室に嫁ぐ唯一のできごととなりましたが、この和宮の降嫁がどのように行われたのか、呂久の渡しとのかかわりで見ていきましょう。



皇女和宮の肖像画
国立国会図書館「近代日本人の肖像」

1.幕末の公武合体論と皇女和宮の降嫁

(1)公武合体論から皇女和宮の降嫁

嘉永6年(1853)、**アメリカ海軍ペリー**提督が来航し開国と通商を強く要求すると、幕府は、これまでの**鎖国から開国**へと転化し、幕府の根幹が大きく揺らぎ始めました。

そして、安政5年(1858)、大老井伊直弼は、**勅許**(朝廷の許可)が得られないまま**日米修好通商条約**に調印し開国を進め、この専断に対して、**尊王攘夷派(天皇を尊び、外国勢力を排除する)**による反対運動が高まりました。井伊はこの尊攘派の動きに弾圧を加えると【**安政の大獄**】、これに反発した水戸・薩摩浪士らによって**井伊は殺害され**【**桜田門外の変**】、幕府の威信は失墜することとなりました。

こうした中、幕府は、朝廷と幕府の提携による政局の安定、権威の回復を図る**公武合体政策**を進め、万延元年(1890)4月、幕府は老中連署をもって、**第14代将軍徳川家茂(いえもち)の正室**として、**孝明天皇の妹の皇女和宮の降嫁(結婚)を請願**したのでした。



中山道分間延絵図　呂久
国立博物館 研究情報アーカイブス



和宮江戸下向絵巻　輿(こし)
東京都江戸東京博物館所蔵

(2)皇女和宮の降嫁

和宮は、弘化3年(1846)5月、仁孝天皇(にんこう)の第8皇女として誕生し、6歳の時に**有栖川宮熾仁親王(ありすがわのみやたるひとしんのう)と結婚の内約**を結んでおりました。そのため兄の孝明天皇は、【有栖川宮との内約があること・皇女の徳川家降嫁の前例がないこと・政情が不安定であること】等の理由で、降嫁を許可しませんでした。

しかし、万延元年(1860)10月、状況が変わります。攘夷の実行を図る孝明天皇の要望を受け、幕府が外国との通商条約を破棄し、鎖国を復旧し攘夷の実行を誓約したため、降嫁の勅許が出されました。頑なに拒まれていた**和宮**でしたが、有栖川宮との婚約は破棄となり、孝明天皇の幼い宮を送るか退位しかないという苦悩を聞くに及び、君と民のためならばと悲壮な決意を、「惜しまじな　君と民の為ならば　身は武蔵野の　露と消ゆとも」とその心情を詠まれ、輿入れを決意されたのでした。

その後、皇女和宮は、文久元年(1861)4月、**内親王宣下**を受け「和宮」から「親子(ちかこ)」という諱(いみな　正式名称)となり、**「親子内親王(ちかこないしんのう)」**と、身分を高め輿入れが行われました。



瓦版　中山道御下向御休泊御本陣附
岐阜県博物館所蔵

2.皇女和宮降嫁の大行列

(1)幕府側の準備体制

皇女和宮の降嫁は、江戸幕府にとっても命運をかけるものであり、幕府は京都から江戸までの通行準備のために中山道の沿道を整備しました。また、尊王攘夷運動が激しくなる中で降嫁となるため、行列の厳重な警備を命令手配しました。

将軍家正室の江戸下向は、そのほとんどは中山道を多用しました。中山道は山道や峠道が多く道は険しいものの、難所は少なく、大きな河川も少なく、川留め等で到着が遅れることも少なく、ほぼ日程通りに江戸に到達できたためとされています。皇女和宮の降嫁に伴う供奉の人々総数は、**約2万人**と伝えられ、前代未聞の大行列であり、宮の御輿は美しい朱塗りの鋲打ちで外観壮麗な極みであり、**その行列は、約40km**にも及んだとされています。

(2)街道筋の警固

幕府は、道固めする藩として**29藩**、御輿の前後を警備する藩として**12藩**、さらに、和宮の輿を警衛する藩として**12藩**、沿道を警固する藩として**99藩**に命令が下されました。そして、中山道美濃国分に関して、**近江愛知川より赤坂までは**彦根藩主井伊掃部頭が、**赤坂より鵜沼までは**大垣藩主戸田采女正が、**鵜沼以東**は尾張藩主徳川義親が命ぜられました。**沿道警固は垂井まで**が郡山藩主松平時之助、**垂井より美江寺まで**が大垣藩戸田采女正、**美江寺より鵜沼まで**が加納藩主永井肥前守が、**鵜沼以東**は苗木・岩村藩が分割しました。この**呂久のあたりは、大垣藩の警護と地固め(警備)**が行われました。【資料参照】

(3)中山道の整備

幕府は、中山道の大掛かりな整備を宿場内の景観改善を求めるだけでなく、街道の改修を求め、宿内の往還通りの見苦しい古屋や空き地は恐れ多いと建物の改修や新築を求め、道から6尺(約1.81m)の幅で藪を刈り上げ、道や橋で危険な個所は入念に修繕すること等を命じ和宮の行列の輿(こし)が通過する際には、庶民は見物することも禁止されました。

また、街道沿いの各宿場には、助郷役が、義務付けられ、人馬継立の負担が課せられました。赤坂宿は、21か村12,441石。美江寺宿は、18か村12,299石。河渡宿は、19か村12,714石で、定助郷・当分助郷などすべてが継立に従事することとなりました。

中山道の警備

垂井から美江寺の間に、22か所を指定して、呂久近辺は3か所、旧巣南地区内に6か所、呂久では渡船場より西枝道(呂久村出郷)、渡船場より東(北脇村)、渡船場より南東(中宮)に、それぞれ物頭1、長柄支配1、鉄砲10、足軽20、計40人の人事を決め、行列前から昼夜休まず7日間厳重な警備態勢を取りました。

和宮通輿の際の布達一部(10月19日)

1.宿内の手桶・盛砂・夜分は、高張提灯二張を出していくこと。
2.通輿の道筋は人拂を命じる。見物に出て来てはいけない。
3.宿及び街道沿いの家で、男は見物してはいけない。女子供は入口より二～三尺中で平伏して拝見すること。
4.宿及び街道沿いの家は、すだれその他を取りはずし、家内が見通せるようにすること。

(4)降嫁の日程

10月　3日　祇園社(京都　現在の八坂神社)に参詣。
7･8日　荷物の一部を発送、枠差物27棹、琉球包差物27棹、張籠長持12棹
11日　御用物6個発送。
13日　御召車外道具類83個発送。
※大量の荷物は、垂井宿から美濃路を経て東海道を江戸へ。
20日　京都桂御所を御発御輿(おんはつよ)。中山道を江戸に向け出発。
26日　和宮は赤坂宿から呂久の渡しへ。呂久・美江寺宿で小憩。
河渡宿で昼食。加納宿泊り。
11月 15日　江戸到着、清水邸に入る。
12月 11日　江戸城入城、大奥へ。



和宮江戸下向絵巻　美濃呂久川の観楓
東京都江戸東京博物館所蔵

(5)御座船による呂久の渡し

文久元年(1861)10月26日朝、赤坂宿の御旅舎を出発、大垣藩が御警衛を行う中、呂久川に差し掛りました。皇女和宮は、御座船(ござぶね)にお乗りになると、舟人たちは六つの櫓を押して舟唄もにぎやかに漕ぎ出して呂久川の澪をゆるやかにお進みになりました。

この時、和宮は、さつきをしつらい、はた錦、綾錦をもって美しく飾った御船の玉簾(たますがれ)の中から四方の景色を眺められ、東岸の馬渕孫右衛門(まぶちまごえもん)の庭に茂って**色麗しく紅葉している楓**をお目にとめられ、一枝お望みになられました。別の子舟が急いで折って来て差し上げると、舷(げんふなべり)に立てさせられ、あかずに御覧遊ばれて、**「おちてゆく 身と知りながら もみじ葉の 人なつかしくこがれこそすれ」**と御感慨をお詠いになりました。

宮の御座船は、三町ほど溯って(さかのぼって)、やがてゆるやかに下りつつ呂久の岸へ無事にお着きになると、宮は馬渕孫右衛門の宅にお入りになり御小休遊されました。そして、再び御行列を整えられて御発輿、東へとお進みになりました。楓は御輿の御簾に挿して河渡の宿まで進まれました。



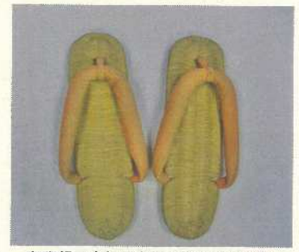
渡舟の巡路　呂久の渡し

(6)江戸での生活

御結婚の御儀式は、**文久2年(1862)2月11日に挙行**、**皇女和宮は14代将軍家茂の正室**となり、御夫妻ともに16才でした。当初、和宮は、家茂について関東の荒武者を想像していましたが、実際の家茂は、温厚で思慮深い若者で、和宮のほかには側室をもつこともなく、次第に和宮も心を許し、仲は睦まじく、和歌やかんざしを贈りあったとされています。

和宮の降嫁にあたり、京の朝廷での生活作法とは全く異なる江戸城大奥の生活に不安も多く、①御所から女官を連れていくこと、②大奥でも京都と同じように生活ができるよう取り図ること等の条件がつけられていましたが、姑にあたる13代家定の正室篤姫(天璋院)など、幕府側との確執が多くあったとされています。しかし、降嫁を通じ、京都の宮廷文化や作法が江戸城の奥に浸透していくこともあったようです。

なお、江戸時代、**徳川将軍家及び将軍世子の正室**は、**摂家**(公家社会の最高身分として五摂家【近衛家・一条家・九条家・鷹司家・二条家】)から8人、**宮家**(主に4親王家【伏見宮・桂宮・有栖川宮・閑院宮】)から5人、など摂家・宮家から迎えるのがならわしでした。天皇家の皇女で、将軍家の正室になったのは、仁孝天皇の皇女で孝明天皇の皇妹(異母兄妹)である和宮だけでした。



和宮親子内親王東下の際の道中履物
瑞穂市指定文化財　巣南公民館所蔵



和宮「手折れの紅葉」
垂井町教育委員会・タルイピアセンター所蔵

第二部 皇女和宮の遺徳と小簾紅園

皇女として徳川家に降嫁した**和宮**は、降嫁の条件であった攘夷の実行を願いますが、圧倒的な武力の差から攘夷は不可能となりました。その後、家茂公が早世後は静寛院宮となり、幕府倒壊後も徳川家に残り、天璋院と共に、朝敵となった汚名を残すことはできないとして徳川家の家名存続や江戸城の無血開城を嘆願し、その実現に尽力しました。

こうした和宮の遺徳(功績)は余り知られてはいませんが、**昭和4年、和宮の遺徳を偲ぶ小簾紅園**が呂久の渡し跡に開設されると、以後、春は神式の例祭が、秋は仏式の例祭が、降嫁の道中の中で唯一、営々と実施されてきたのでした。

この地に住む人々にとって、代々継承する和宮の遺徳(功績)とは、何だったのでしょう。









小簾紅園　昭和４年開設　　絵葉書　　呂久　個人蔵

1.皇女和宮の遺徳(功績)

(1)和宮降嫁の条件であった攘夷を貫く

幕府は、和宮降嫁の条件であった**攘夷の実行**を模索する中、文久3年(1863)3月、14代将軍**家茂**は尊王攘夷派の勢力が強い京に230年ぶりに**上洛し、朝廷に5月10日に攘夷の実行を約束しました。**しかし、幕府の**攘夷実行の前**の文久3年(1863)5月、**長州藩**が関門海峡を通過する外国船(米・仏・蘭)を砲撃し攘夷を実行したのでした。翌文久4年(1864)、英・仏・米・蘭による報復の砲撃を受け、長州藩の砲台は制圧され、圧倒的な武力の差に**攘夷は不可能**となりました【四か国艦隊下関砲撃事件(下関戦争)】。その後、元治元年(1864)8月、京を守護する幕府側と尊王攘夷派の長州藩との間でおこった武力衝突【蛤御門の変(禁門の変)】で、**長州藩は朝敵**となり、幕府は長州藩を征討【第一次長州征伐】しました。しかし、その後の慶応2年(1866)の**第二次長州征伐**では、長州藩内の討幕派が実権を握り最新の西洋式兵学と新式鉄砲で武装し、幕府は撃退されてしまいました。そして、三度目の長州再征のため上洛していた**14代家茂**は、慶応2年(1866)7月**大坂城で21才の若さで脚気心により急逝してしまうのでした。**

朝廷・和宮が願った**攘夷**は、**家茂逝去後**、尊王倒幕へと進む一方、和宮は、徳川家に残ることとし、同年末の12月に剃髪式を行い、天皇からの**静寛院**の院号を称しました。こうした中、15代慶喜は大政を奉還し、徳川家の存続を企図しますが、新政府は、王政復古の大号令を発し、徳川家の辞官納地を命じ、その勢力を抑えにかかり、この対立は激化していきました。